

〈資料紹介〉

伊藤昌哉と池田勇人

——未公開史料を用いて読み解く師弟関係——

小 枝 義 人

要旨 二〇二二年七月八日、元首相・安倍晋三を死に追いやった銃撃事件は、日本のみならず、世界中に衝撃を与えた。首相・岸田文雄が決断した吉田茂以来の安倍の国葬挙行も大きなニュースとなったが、現職議員であった安倍の国会での追悼演説を、立憲民主党の元首相・野田佳彦が行うまでの紆余曲折も世間の耳目を集めた。

その前例とされたのは、池田勇人内閣期の一九六〇年一月一二日、早期の衆議院解散が既定事実となる中、日比谷公会堂にて開催された自民党、社会党、民社党「三党首大演説会」で、社会党委員長の浅沼稻次郎が演説中、山口二矢という一七歳の右翼少年に刺殺された際、解散を行う臨時国会の場で行われた池田による浅沼に対する追悼演説である。演説原稿を執筆したのは、池田の首相政務秘書官・伊藤昌哉であった。この演説は、日本においては本格的なスピーチライターによる演説の嚆矢とされている。

筆者は後年、政治評論家に転じた伊藤と一九八〇年代半ばから死去する二〇〇二年二月まで、放送記者や新聞記者の立場での取材を通して凡そ二〇年間の交流があった。伊藤の死後、淳子夫人から故人の政治史料の一部を託された経緯もある。その中に「池田さんと私（人間関係）」と題する二〇〇〇字詰め原稿用紙にブルーのインクで書かれた二四枚に亘るメモがあった。

それに加え、同じく二〇〇字詰め原稿用紙七枚に綴られた補足メモも残されている。

升目を埋めるだけでなく、用紙の欄外にも、後から挿入された様々なことが加筆されている。本稿は、このメモを翻刻し、池田と伊藤の間に存在した濃密な師弟関係を紹介することが目的である。このメモから、最高指導者とそれに仕える者の間に存在する規範、秩序が見い出せればと期待している。

キーワード…池田勇人、浅沼稻次郎、登坂重次郎、情報将校

解説

伊藤昌哉とは、いかなる人物であろうか。簡単に伊藤の履歴を辿っておこう。伊藤は戦前、中国・大連で生まれている。東京帝国大学法学部を卒業後、陸軍西部四二部隊主計少尉、中尉として中国大陸で従軍、敗戦後、福岡に引き揚げ、西日本新聞社に入社し、東京支社にて経済部、政治部記者として勤務した。経済部にいた頃、池田勇人の知遇を得て、やがて退社し、池田が創設した自民党の派閥・宏池会に入職した。池田の首相在任中は政務秘書官として、一心同体のように仕え、後に大平正芳のブレーンとして大平内閣発足に尽力した人物としても知られる。

筆者は後年、政治評論家に転じた伊藤と一九八〇年代半ばから死去する二〇〇二年一二月まで、放送記者や新聞記者の立場での取材を通して凡そ二〇年間の交流があった。伊藤の死後、淳子夫人から故人の政治史料の一部を託された経緯もある。その中に「池田さんと私（人間関係）」と題する二〇〇字詰め原稿用紙にブルーのインクで書かれた二

四枚に亘るメモがあった。それに加え、同じく二〇〇字詰め原稿用紙七枚に綴られた補足メモも残されている。升目を埋めるだけでなく、用紙の欄外にも、後から挿入された様々なことが加筆されている。

本稿で紹介するこの二つのメモは、池田の死後に書かれたことは内容からも明白だが、一体、何の目的で書かれたものなのであろうか。その中身は「伊藤と池田の関係」に絞ったもので、『池田勇人―その生と死』（至誠社、一九六五年）を始め、伊藤が執筆した著作の中にも、ここまで赤裸々に心象風景は記されてはいない。

最初に「池田さんと私（人間関係）」と記されたメモから見よう。筆者は、このメモは、池田の首相政務秘書官という特殊な職歴を持つ伊藤に、「政治家と秘書との関係」についての講演要請があった際に書いたものではないかと推測する。文中には「皆さんと私は同じ立場であったと思う」と記してある。「皆さん」とは、文章の前後からして政治家秘書を指すのではなからうか。さらに想像を逞しくすれば、宏池会に所属する国会議員の秘書会から、伊藤に体験談を含めて「政治家と秘書との関係」に関して語ってもらおうよう懇願された可能性もある。「伊藤と池田の関係」が、「政治家と新聞記者の関係」、「政治家と秘書の関係」、「大臣と政務秘書官の関係」、「首相と政務秘書官の関係」へとヴァージョン・アップしていく過程で、変わるもの、変わらざるものを伝授してもらいたい。そんな要望に応えるため、伊藤が講演用に記したものが、このメモだとすれば理解し易い。

伊藤は後年、政務秘書官だった頃の自らの存在意味について「結局、当時の私は情報担当将校だった」と述べている^①。さらに続けて「池田はほかのことを一生懸命にやっていたから、一体、俺はどういう立場におるんだとっていつたときに、情報を求められる。『このことはこうなっています』あ、そうか。それで明日、あいつが俺んとこへ来るんだな」と。そういう情報によって武装された池田は、閣僚、幹事長と会う、いろんな人と会って、対応するとなる。最後は、内閣改造で困ったときなども判断を求められた」と語る^②。

もちろん、伊藤とて、一足飛びに、ここまでの地位に上り詰めたわけではない。そこには数知れぬ葛藤と紆余曲折があった。

西日本新聞社に入社し、東京支社で政治部記者を務めていた一九五一年頃、伊藤は毎晩、池田の私邸の夜回りを繰り返していた。新聞各社の政治部記者たちとの懇談が終わり、彼らが帰途に就くと、伊藤だけが再び舞い戻り、池田が電話で有力政治家と遣り取りする場面を脇で聞かせてくれたという。

そうなれば、今後の政局の動きは簡単に予見できる。しかし、他紙とは一味違った伊藤の記事が関係者に知られることは、ほとんどなかった。西日本新聞は福岡を起点とする九州ブロック紙であり、全国紙ではないため、翌朝、永田町の関係者が自由に読めるわけではない。新幹線や高速道路もない当時の交通事情を考えれば、福岡で印刷された新聞が鉄道便で東京に着き、福岡選出の国会議員たちの議員会館事務所に届くまでには、一日のタイムラグが生ずる。加えて、池田から聞いた情報によって書かれた伊藤の記事は一面には掲載されず、解説記事として、二面や政治面に載るため目立たなかったと、後年、伊藤が筆者に述懐していたことを思い出す。

政治家・池田と新聞記者・伊藤の深い関わりを知る他社の新聞記者もいたが、全国紙でないことが、伊藤が比較的自由に取材できる余地を残していた。伊藤本人は、政局の流れを池田を通じて知り、数日後、その通りに動くため、毎日が楽しくて仕方なかったと回想している。

ただ、新聞記者としての楽しい期間は長くは続かない。定期的な人事異動により、伊藤は一九五六年一月、本社整理部に呼び戻される。しかも本社業務は取材・編集ではなく、整理・校閲である。時間内に見出しを考えることが大の苦手だった伊藤にとって、この仕事は苦痛以外の何ものでもなかった。

二年間、整理部に勤務したものの、ついに伊藤は退職を決意、一九五八年四月、池田を頼って上京する。

文中に「佐トウガ池田カ」と迷ったような表現が出てくる。伊藤は公言することはなかったが、新聞記者当時、佐藤栄作とも関わりがあった。池田と慎重居士の佐藤は性格が全く異なる。佐藤は決して余計なことは口にせず、しかも、身嗜みに煩かった。服装には無頓着な伊藤に対し、一分の隙もないスーツ姿の佐藤は、カッターシャツのボタンは一番上まで留めてから、ネクタイを締めるものであると注意したことがあったという。佐藤とは合わないと判断した伊藤は池田を選んだ。

「去る者日に疎し」と記しているが、まさに福岡で過ごした二年間で伊藤は永田町の動きに疎くなってしまった。そのため、政治勘を取り戻すには、しばらくの時間が必要となる。

伊藤は、まず宏池会スタッフとなった。だが、実際は新宿・信濃町の池田邸に待機するだけで、決まった仕事もないという境遇に置かれる。

伊藤と同じような立場の人物に登坂重次郎がいる。登坂は伊藤より四つ年上だが、ほぼ同世代である。郷里の旧制北海道中学卒業後、土浦税務署に入り、太平洋戦争末期に東京財務局に栄転し、局長の池田に仕えることとなる。池田が大蔵省の主税局長に転出すると、池田に引つ張られる形で登坂も主税局事務官として勤務し、池田が衆議院議員選挙に立候補すると聞くと、独断で職を辞し、そのまま池田の地元・広島に向いて選挙運動を手伝い、当選後は秘書として池田を支えた。伊藤が秘書となった時点で、池田事務所の大御所は登坂であった。

二人は勤務先を辞し、池田の懐に飛び込んだ点では似ていたが、決定的な違いがある。登坂は、池田が大蔵省にいた頃も、衆議院議員になってからも、部下として「上司に仕える立場」で一貫していたが、伊藤は新聞記者として「取材する立場」からの転身だったことである。伊藤は「政治家と新聞記者の関係」から「政治家と秘書の関係」に変わったことによる意識の切り替えに苦しむことになる。

年齢が近いこともあり、必然的に伊藤にとってライバルとなるのは登坂だった。池田が石橋湛山内閣、第一次岸信介内閣で大蔵大臣、第二次岸改造内閣で通産大臣を務めた際は、登坂に政務秘書官に就いている。ただ、池田が登坂に求めたものは、影のように付き従い、選挙区や身の回り一切の世話をするような役割で、情報将校たるそれではないことは、池田も登坂も自覚していたであろう。登坂にできることを池田が伊藤に求めるはずもない。池田の政治活動を支える情報将校になり切るための意識改革こそが、伊藤の課題となった。

そんな中で、伊藤が最初に命じられた仕事は、新聞記事の切り抜きと、その要旨を池田に知らせることだった。池田が自宅を出るのは午前九時頃である。それまでに手渡すため、早朝から作業を始めなければならなかった。秘書になりたての伊藤が意気消沈気味に作業をしている姿を見たサンケイ新聞記者・吉村克己が、そのことを池田に伝えた。「勉強させようと、思つて切り抜きをやらせているんだ。それが立派な仕事だ。プーちゃんにそう言ってくれ」それを伊藤に伝えると伊藤は『そうか。池田はそう言ったか』と途端に元気になった⁽³⁾という。「プーちゃん」とは伊藤の愛称を指す。

ところが、池田邸に出入りして一カ月も経たないうちに衆議院が解散する。伊藤は池田の全国遊説日程の作成と選挙公報に載せる池田の政策を書くことも命じられた。政策は池田と大蔵省入省同期の親友で、宏池会事務局長を務めていた田村敏雄に聞いたものを書いて持つていくも、修正を命じられた。そんな苦労を重ねるうちに伊藤も徐々に成長していく。

毎日の蓄積の中で、体で物事を覚えていき、要領も分かってきた。しかも、仕入れた情報は直接、池田の耳に入れるのではなく、まずは側近議員の大平正芳や鈴木善幸、宮沢喜一に知らせ、情報を共有した上で、彼らの判断で、必要な情報が池田本人に誤りなく伝わっていくことも学んだ。

選挙後、第二次岸内閣が発足した際、無任所の国務大臣となった池田は伊藤を政務秘書官に起用する。登坂の心境は複雑であったであろう。池田はバランスを取るため、翌一九五九年六月の改造人事で通産大臣に就任した際は、登坂を再び政務秘書官にした。

伊藤は毎朝、池田私邸から池田の公用車に同乗して無任所大臣室がある首相官邸に通うこととなった。その頃から、かつて新聞記者だった際に体得した政治勘を取り戻していく。池田と同じ時間を共有する機会が増えればリアルタイムで池田の考えに接し、確認ができる。側近議員や事務秘書官も、伊藤を通じて情報交換によって、池田の考えを正確に知ることができる。情報将校としての使命を伊藤は徐々にマスターしていった。

筆者の手に池田の妻・満枝が伊藤の妻・淳子に贈り物に添えて渡したメモがある。「大蔵大臣 池田勇人」と印刷された名刺のスペースに書かれたものだが、当時の伊藤の精勤ぶりが窺えて興味深い。

御主人様毎晩おそくまで

よく御働きになります、皆で感

心致して居ります 御粗末な品御納

め下さいまし

大蔵大臣 池田 勇人

内

伊藤御奥様

一九六〇年七月、池田内閣が発足すると、伊藤は首相政務秘書官となる。それは池田が退陣するまで四年四ヵ月間に及んだ。登坂は念願の首相政務秘書官になることは叶わなかったが、一九六三年一月、池田内閣下における最後の衆議院議員選挙で郷里の茨城旧三区から立候補して初当選を果たし、後に当選六回を重ねている。

そんな伊藤が首相政務秘書官としての真価が最初に問われたのは、池田内閣発足から三ヵ月後の一〇月一二日、ライバル政党たる社会党委員長の浅沼稲次郎が、日比谷公会堂にて開催された自民党、社会党、民社党「三党首大演説会」における演説中、山口二矢という一七歳の右翼少年に刺殺された直後、池田が国会で行った浅沼への追悼演説の草稿を、伊藤が書いた時である。池田は伊藤に「おれが読んだら、議場がシーンとしてしまうような追悼文を書いてくれ」と頼んできたという⁽⁴⁾。

衆議院事務局が用意した追悼文は平々凡々としたもので使い物にならなかった。そこで伊藤は手当たり次第に浅沼に関する資料を集めることにした。その中に日本経済新聞に掲載された浅沼の執筆による「私の履歴書」があった。読んでみると、浅沼の友人が詠ったという「沼は演説百姓よ」で始まる詩が載っていた。伊藤は、これを盛り込み、短期間のうちに草稿を仕上げた。

追悼演説は大成功だった。池田は後に「あの演説は、五億円か十億円の価値があった」と評価し、伊藤は「その後、死の寸前にいたるまで、私は池田の心のなかに自由自在に出入りすることができるようになった」と語っている⁽⁵⁾。池田の考えることと伊藤の思いが一致したのであった。以来、伊藤は池田のスピーチライターとして様々な演説原稿を書き上げていく。

「心のなかに自由自在に出入りできる関係」とは何か。メモには、その様が生き生きと描かれている。説明が必要なのは「あいよかけよの関係」であろう。「あいよかけよ」とは岡山の古い方言で、二つの存在が互いに力を出し合い協

力する様子を指したものである。伊藤は岡山に本部がある金光教の熱心な信者だった。故に、このような方言が出てくるのであろう。「伊藤と池田の関係」は「あいよかけよの関係」、言わば「切っても切れない関係」であり、そのことが多くの紙幅を割いて説明されている。

メモには、「山本条太郎の話 学生―山本条太郎―就任「職の異体字」の問題で相談」との一文もある。これには解説が必要だろう。伊藤が知り合いの「学生」の就職を、池田と懇意にしていた会社に依頼し、無事、入社できたことあった。池田の手を煩わせまいと、伊藤は池田の妻・満枝にだけ報告し自ら動いた。ところが、池田の死後一年以上経って、伊藤は、池田本人が、その会社の「社長と専務とに、居すまいを正し、ていねいに頭を下げてたのんでくれた」ことを知る。「会社の人」は伊藤に「社長が言っていましたよ。『池田さんとはながいつきあいだが、池田さんから個人的にものをたのまれたのは、池田さんの甥と、あなたの知り合いの人の二回だけだ』って」と言っていた⁽⁷⁾。「あいよかけよの関係」を物語るエピソードの一つである。

戦後日本の復興を世界に発信した東京オリンピックが閉幕した翌日、一九六四年一〇月二五日に、池田は病のため、首相退陣を表明した。補足メモには池田退陣から死去までの一〇ヶ月が記されている。池田が亡くなるまでの間の心の葛藤、「あいよかけよ」の相手を亡くした伊藤が、池田の死をどう受け止めたのか、今後の人生をどう生きていくべきか、考え抜いたものを綴ったものであろう。

文中に「十月十九日 引退声明の六日前 お道の信心をす、めたことあり」とあるが、伊藤は池田に信心を勧めたようである。金光教の信者である伊藤は政治家には信仰心が必要であると考えていた。伊藤は著書『哲学のない政治家が、国を滅ぼす』（致知出版社、一九八九年）の中で「政治的リーダーはリーダーとしての能力がなくてはならない。だが、それだけでは十分でない」とした上で、「それ以上に、自分の能力などでは及びもつかない課題に立ち向かって

いくなのだから。別の力によって足らないところを足してもらわなければならぬという強い認識が必要である。リーダーたる者には信心、あるいは宗教心が不可欠であるゆえんが、ここにある」と述べている。⁽⁸⁾

池田に宗教心がなかったと言いはない。実際、大蔵省入省後間もなく、不治の病と言われた難病の落葉状天疱瘡を発症し、五年間の闘病生活後、奇跡的に回復するが、病氣治癒のため四国巡礼の旅もしている。病氣が池田の信仰心を篤くしていたのである。首相当時は閣議の机下で、数珠を握り、政策判断が国のためになるよう祈念していたとも言われている。

池田は退陣後に、一度は回復し、自宅に戻ったものの年明け二月頃に再発する。補足メモには、八月に死去するまでの経緯も時系列で記されている。伊藤は、池田の死後、今後の自らの生き様を模索するようになる。池田から与えられたものは「信念、勇氣、友情、考へ方」と記し、「楽な方へと考へずに進ませてもらう」と締め括っている。

池田が退陣した年の師走、東京プリンスホテルで伊藤を激励する会があり、政財官界、言論界から三〇〇人以上の名士が集まった。この席でスピーチに立った伊藤は四年四カ月の首相秘書官生活で学んだこととして「一人が仕事をするのはなく、多くの人が仕事をするのである」ということだ。多くの人というのは、その人の友達である。(中略)本日、ここにこられたのは、おやしさんとそのような関係にあった方々ばかりである」と述べている。⁽⁹⁾ 政権は一握りの側近だけで維持できるものではない。どんなに彼らが優秀と言えども、そこには自ずと限界はある。広く世間の出来事に思いを馳せ、民意を汲み取るため、幅広い民間人との交流から、彼らの意見、アドバイスを耳を傾ける謙虚さが不可欠であろう。

「多くの人が仕事をする」という伊藤の言葉は、そういう意味ではないか。この時、伊藤は四七歳、池田との得難い出会いを糧に、八五歳で亡くなるまでの約四〇年間、政治評論家として活動を続けた。宏池会の古参、元防衛庁長官・

瓦力が述べているように「政治的なこととなると機敏で繊細な神経の持ち主だった。世間の動向を読むことになり長けていたし、無欲で、直言には重みとキレ味があった。(中略) 政治を手段に使わず大局で見据えていた稀有の存在」という評価に落ち着くだろう。¹⁰⁾

まさに情報担当将校としての生涯であったが、そこには深い信仰心に裏打ちされた信念があった。最高指導者とそれに仕える者の間に存在する規範、秩序が、瓦の伊藤評に凝縮されているように思える。

以下は、そのメモと補足メモである。() の数字は原稿用紙の頁数である。このうち、(1)にある「親爺さん」とは自らが仕える政治家、(3)の「中小企業の二人や三人といったあとだった」とは一九五〇年三月一日、当時、大蔵大臣だった池田が記者会見で中小企業の「五人や十人倒産し自殺しても国民全体の数からみれば大したことではない」と発言し、厳しく批判されたことを指している。¹¹⁾

メモ

(1)

△池田さんと私(人間関係)

人間か忸くということについて人間関係は極めて重要である。

× 秘書、秘書官と 親爺さんとの関係―人間間(ママ) 係が極めて大切である。それかモトなのだ。

× 「事務をやつていてそれか事務にならぬ」その根底に人間間(ママ) 係かあるということだ。

× 一切は人間間(ママ) 係(心のヴェクサセル、ヴィクング 心的交互作用)の反映なのだ。

×それは私達が意識してそうなたものではない。

(2)

×それを狙ってやったのならワザとらしくなる。

×何時の間にかそうなたところ、に意味があるように思う。

×それには 秘書（秘書官）の生活態度が極めて大切である——生活の積上げ作用が基礎にあるのではないか

△どのように展開したか（私の体験）

×私は新聞記者だった。池田は政治家だった。

×官僚政治家——これから政党内にならうとしていた。

(3)

↓中小企業の二人や三人といったあとだった。——秘書を使う人は必ず問題か、えている——真剣にとりくんでいる
○問題意識——取組みをつている）皆さんと私は同じ立場であつたと思う。

一。新聞記者と政治家の間はある程度肚のさぐり合ひである——いつてみれば本当の人間間（ママ）係ではない。——多分に取引の関係がある。——いはゞ利用し利用される関係——もちつもたれつの関係なのだ

(4)

私と池田↓。おもしろい人物だな―将来大きくなる可能性があるかもしれないという関係―どちらにも遠慮がある―池田氏をそれほど好きだった譯ではない―好意はあつた―別に尊敬はしていなかつた。

△転勤になつた。

×池田との関係は遮断された。―二年間

×去る者日に疎し

×私は東京に帰るつもりだつた―帰れない―とうとうやめる決心をした―色々考へた。だれだらうか 佐トが池田か―池田となつた。

(5)

×池田邸に入つた。―やる仕事かない―。新聞記者と政治家でない面が出て来た。

×。大平の言葉 ツライよ―大変な荒れ馬であつた。―放射能をもつ―あてられる。―仕事かない―。いやになつた。

○。何度もやめようと思つた―。しかしふみ切つてしまつた以上やめるワケに行かない―。私は完全に自分をおいこんでいたことになる。

×色々池田のアラが見える―こうなると 相手方もこちらのアラを見ている―頑張つて何か

(6)

やらうとする―ヘマをする。

- × 毎日が苦しくなる―俺なまぞこ、に居なくてもよいのではないかと思う―疑うし迷う
- × 池田夫人の兄（医者）と話したことかある（不必要だと思つたら池田の方からヤメてくれというよ　そりいり男本のだよ　何も取越苦勞する必要はない）
- × あとで聞いたら　皆んなそこを通つて来たらしい。
- × 池田かこわくなる―逃げる―また文句を

(7)

- いう。相手はきらはれていると思うのだ。
- × 俺がこわいか　こわい
- × 〇どこがこわい　どこもこわい
- × こういう関係か約一年つゝいた。

△この間　こう考へた。

- × 俺は力かたらない。池田勇人と競争してもはじまらない　だか全力を出す。表も裏もないこの力を見てもらう―池田に見てもらうのではない　天地にみてもらう
- × 〇俺は池田を通じて天地（神）につかえるのだ。

(8)

×池田かどう思はうとよろしい

△状況の分析

×仕事は全部他の人で間に合う（七人程度の秘書 書生）―判況分析、取材に努力する―（新聞 記者だつたから）

―これを池田にすぐ話すのは思いあがりだ―大平、鈴木善幸に話す―大平、鈴木が池田を補佐すればよい

△新聞の切り抜き

×池田から云はれた仕事は一生懸命やる―

新聞の切抜きを二年やつた―毎朝六時お

（9）

き―七つか八つの新聞を読んで切り抜き―要旨をかく―三時間かゝる。―九時までにとゞける―何んでもないが大変苦しい仕事だつた。（日かたつにつれて）

×〇二年たつたある日 もういいと池田か云つて これ卒業となつた。一度もこちらから苦しい いやだと云つたおぼえはなかつた。

△文書をかく

×選挙公報を書かされた―〇全然書けなかつた

○池田の考へ方を何もしらないからだ。―書けば

（10）

○自分の考へになる。池田の考へ方なぞ一つも出てこない―書けないとなる。(池田のところへ行つて一ヶ月目に選挙となつたから)とうとう書けなかつた。死んだ田村氏が代つて書いたことごと(ママ)がある

×あとから 政治に関する一切の文書は私の仕事になつた―。演説、○あいさつ (×ギ員總會、×結婚、×弔詞、×施政方針演説) は全部私の仕事となつてしまつたのたか はじめはこうだつた。

(11)

×だんだん池田か判つてくれば書ける―判つた深さだけ 書ける。

×浅沼弔詞が転きになる―しまいには○池田以上に池田的となる―私か池田か池田か私かわからなくなる―。私か思つた通り池田か思う、池田が思はぬ以上に私か思う―私か池田となる。

×「池田の思ひを推測する―現状をみる―こう考へねばならぬと思う。―私の考えか入る―総理大臣という場(ママ)はこう考へねばならぬと思う」

(12)

それを文章にする―池田かダメつてパスさせる―

反響がある―池田自身かびつくりする―私の考へを注目する―。池田と私かだんだん近くなる

△心配ごと

×心的(メンタル)なヴェクゼル、ヴェイルクングか作用していつた

- ×私は池田の心配を心配するようになった、
- ×あんまり心配して 池田から注意された
- (心配するのはよいが ○心配を俺に言うな)
- (ブーチャンがこういうから 俺はしないんだと他の人に言ったことがある)

(13)

- ×そこで秘かに心配して考へをまとめ対策を云うようになった。
- ×○こういう問題がある―。私はこう思う(このように発展すると思う)―。私はこうすべきであると思う
- ―池田は何も云はなかつた あるときなどはもうれつに反対した だか翌日 必ず その通りにするようになった。
- ×私はあとから ハハアンと思うことか多くなつた。―
- ×これを利用していたら 私は今ごろ大金持だらう。

(14)

- △あいよかけよの関係
- ×○私は池田あつての私と思つて仕事をした
- ×池田か私をどう思うかは問題にしない
- ×常に池田を中心にして考へた
- ×○逆に云々へば 私という人間をすこしづゝ捨て、行つたことになる

- ×○池田は私を不思議な奴だと思つたことだらう
- ×○池田に接近する人はすべて 何か慾かあつただらうからだ

(15)

- ×最後はこうしてくれというものを肚にもつて接近して小忸くるのだらうと思つ
- ×○接近される方は それを敏感にゆゆ感じるものだ。
- ×ところが 何時までたつても そういうことかない
- ×どうも変だ 変な奴だと思つてくる
- ×○ところか その男の書いたものをつかうと反応響がある
- ×使つてみる――また反響がある――ますます使つ

(16)

- ×結局、伊藤ははなせないとなつて行つたのであらう。
- ×○問題は才能ではない。
- ×○才能もあつたかもしれないが)私よりすぐれた才能はいくらでもいる
- ×○池田と私との間のような 生きた作用、反作用をする人間か少かつた ということだらう

- × (○)人間間 (ママ) 係は いのちのひびき合いです (○)
- × 生命と生命のふれ合いなのだ

(17)

- × それか生きた人間間 (ママ) 係であると思う
- × ○ 恋愛に似ているか 恋愛ではない
- × ○ 同志愛といった 固苦しいものでもない
- × ○ 男が男にほれた というのは少し 大きような話である
- × ○ 夫婦愛では勿論ない

× 「その人が居るということだけで安心だという関係」——「二、三日会はないとどうも心の調子がおかしいという関係」

(18)

× つまり いのちの響き合い といったことしか云いあらはしようのない関係なのだ。

。○このような状態になれば 事ム「〓務」か事ムでなくなってくる。すべてか相談事になつてしまふのではないだらうか。

。やつている事は一寸したことにも生き甲斐を感じるようになるのだ。(充実感がある)
どこにいても何をしてもある力を背後に感じている

(19)

。私がそうだが恐らく池田もそうだっただらうと思う。

◎私には池田はすべてを話したからだ。

◎私は氣がついてみたら池田の周辺で一番池田に近い存在になっていた。

△具体的な事について氣がついたことを、

×ちいさなことに一生懸命になれぬ時は絶対に大きなことに一生懸命になれないということ

×ちいさなことに命がけになれない時は大きなことに絶対に命がけになれない

(20)

×私は池田に命がけになれというたことある↓よく考へて私自身が命がけになつていないのに どうして池田に命がけになれといへるだらうかと思つた。

×秘書(秘書官)の仕事はちいさいことが多い

×だからちいさい事の中にもうれつに大きなことか含まれていることがある

×原子力は原子核の中にある極微の世界のなかにある

- (一) 段ごりのエラーはとりかへすことかできないという原則がある
- ⊗ 手順はよく考へるべきだ―日程の問題の中にすべてかあるといつてもよい。
- × どの人を先にするか どのような応接するか

(21)

- × その下準備はすべて秘書の仕事だ
- × 相手は秘書をみて親爺さんを判断する
- ⊗ 相手がどういう立場の人であるか、判つていなければ問題にならない
- × 池田の問題意識 相手の問題意識を十分知つていなければならぬ
- ⊗ 出来れば それに対する予備知識に池田に入れて置くべきだ(私心なく)
- × 甲を先にして乙をあとにする―この順序をくるはせると一切がバアとなる。
- ⊗ 政治はプロセスである 事業もまたプロセスが大切なはずだ。

(22)

- ⊗ そのエラーはとりかへしかつかない。
- ⊗ このエラーで(ちいさなことの)手順をまちがえて)切腹した人がある

×こういつた。小さな事の積み上げか。歴史をつくると思う。

×つくつている人は 自分がそれに参加しているなどとは夢にも思っていないのだが

㊦ 山本条太郎の話

×学生―山本条太郎―就転「職の異体字」の問題で相談

(23)

×君はいのちか二つになることか知ってるか

×知らぬ

×この人の為なら命をなげ出してもよいという人を一人つくれ―これで生命か二つになる

×自分の為には命をなげ出してもよいという人を一人つくれ これですつになる というたことがある

×非常に興味のある話だ。

↓人間関係は人対人の関係である↓だかその根底に人対神の関係がある↓それかなければ本当の人間関係は生れない

↓あいよかけよの関係は生れない―神あつての氏子の信心かなければ本ものにはならぬ―これはすべてに通ずる道で

あらう

×このはよなことは―人対人の関係の背後にある人対神の関係がある↓信心がある↓そこではじめてこのような人間関係かありうるのである

×その人が死んだらどうなるか

×もし命をなげだそうと思つていたことか 天地に通じ

(24)

ていなければ その人は終るかもしれない

×だか天地という大きな生命力といのちのひびき合いになることかできていないならば その人は死なないはずだ

×また逆に云へばこの天地の生命力と(いのち)の感じ合いになつていなければ ある人との人間(ママ)係か
ひびき合いにならなかつたであらう ということか云へそうである。

トメ

補足メモ

(1)

十月二十四日は忘れられない日(池田かあす引退声明をした日、オリンピック閉会式)

4. 池田前総理の死

1. 三九年九月九日 八日夜入院—十二月七日退院

。手術か 放射線か

。首相代理か 引退か(円満な引退) 10/24 25日

。公選か 指名か(後継総裁)

。すべて おかげを頂く

(十月十九日 引退声明の六日前 お道の信心をすゝめたことあり)

(2)

2 再発―死去

。後遺症の治療に専念

。二月十五日 血タン のどの痛み

。五月頃 医師の疑い

。六月一杯 様子を見る

。七月十八日 再発確定

。七月二十九日 東大入院

。七月三十日 機関(ママ)切開(ものか云へなくなる)

。八月四日 大手術

。八月十三日 死去

(3)

1年↓3年↓5年

3 私の信心

(4)

×退院後 出来るだけ長く生きて頂く願ひ(二年〜四年)

×お禮の生活、「前總理の学を学ぶ」「信心に入る?」

×六月の初旬

。「どうもぐあいかよくない

長期戦だよ」

。「のどのこと、い、の、ち、の、こ、は、私、に、ま、か、せ、て、下、さ、い、」

×「本人に信心かない」「私か代つてお願いする」という氣持

×七月十八日(再発) おとゞけ

×七月二十四五日(みたままつりの翌日) 御本部おとゞけ(手紙を書かせて頂く)

×八月四日から御祈念

×手紙

×七月二十八日(今月今日一心願え)

×八月三日 (我か身は神徳の中に生かされてあり)

×八月十日(神の綱か切れたとか神は切らぬ 氏子から切るな)

(5)

4 最後の最後まで絶対にダメだと思はぬ

。死の際にもお願ひをせよ

。私の一念でも死なせない(のどといのちのことは私におまかせ下さい)

。神様の御比禮をみせて頂く

× 死んだ日には神様に文句を云つた(文句の云へるような信心をせよ)

× 胸にぽっかり穴かあくという氣落ちはなかつた。(これはおかげである)

× 相あいよかけよの相手が死んだ↓何らの変化↓おきづげかないのか残念だつた。

(6)

× 「池田に信心がなかつたから」という言譯も成立つが どうもこれでは肚に落ちぬ

∴ 八月十日に池田との縁か切れたのかとも思う

反省

× 本当に一心だつたのか(寐ない修行?)

× りきんでいたのではないか 神さまを押しまくる。 神さまをはじく

× (思いかへし) 出てくるものがすべておかげである

(7)

×池田はなすべきことを全部なした

×私は信心の飛躍を頂くときである

×一人あるきの出来る信心(身凌ぎの信心)

×一人あるきの仕事をさせて頂く時である

×だから 池田は死んだのだ

×形に見えるものは頂いていない

×形にみえぬものは一番多く頂いている

。信念、勇氣

。友情(池田の友達が非常に私に好意的)

。考へ方

。これらを無にしないことが大切である

①手もとの問題、足もとの問題に四つに組みさせていただく、

②おとりつぎを頂く

③楽な方 楽な方と考へずに進ませてもらう

④やらして頂くという気持、

トメ

注

- (1) 伊藤昌哉『危機の政治・予見の政治』（PHP研究所、一九九三年）、一六五頁。
- (2) 同右書、一六五―一六六頁。
- (3) 吉村克己『池田政権・一五七五日―高度成長と共に安保からオリンピックまで』（行政問題研究所、一九八五年）、一〇二頁。
- (4) 伊藤昌哉『池田勇人―その生と死』（至誠社、一九六五年）、一〇二頁。
- (5) 同右書、一〇五頁。
- (6) 同右書、二四五頁。
- (7) 同右。
- (8) 『哲学のない政治家が、国を滅ぼす』（致知出版社、一九八九年）、二四六―二四七頁。
- (9) 伊藤昌哉『池田勇人―その生と死』、前掲書、二六六頁。
- (10) 「墓碑銘」『週刊新潮』二〇〇三年一月二・九日合併号（新潮社、二〇〇三年）、一六一頁。
- (11) 「読売新聞」一九五〇年三月二日朝刊。

（原稿受付 二〇二三年一〇月五日）